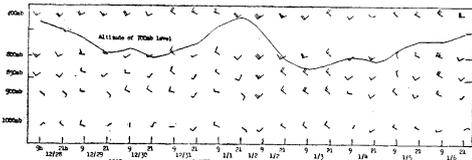


第5図 館野、気温(上)及び湿度(下)断面図



第6図 館野 700mb 面高度及び風の断面図

ており、他は南よりの風である。北よりは上層の谷の後面で天気は良かった。南よりの時は上層の谷前面に当り天気は悪い。最も風の強かったのは2日9時の35m/sで吾々も悩まされたわけである。

7. 結 び

一般的に云って北アに比較して降雪量は少く、西高東低の冬型では天気は良いが、季節風の強さには稜線で大

分悩まされた。2日の低気圧では約10時間程降雪があり、稜線では9時間程地吹雪が続いた。この様に低気圧の通過時に一時天候が悪くなるが、一般に晴の日が多い事が判る。終りに大井正一氏に御指導を頂きました事を深く感謝し御礼申し上げます。

8. 同期間中の遭難事故

この期間中の遭難を拾って見ると12月29日八幡平で盛岡鉄道局青木氏他5名が猛吹雪のため行方不明、1日八ヶ岳権現岳で墜死した横浜市島山氏を捜索中の静岡県芹沢氏が吹雪のため行方不明、安達太郎山で白河市高橋氏他1名行方不明、2日安達太郎山で田村町の佐藤氏行方不明、3日1時頃杓子岳附近で名古屋嶺山岳会員10名がキャンプ中雪崩に流され3名行方不明。鹿島槍高千穂平にキャンプ中の昭和山岳会横山氏他4名は寒さと疲労のため遭難、唐松岳で雪洞に避難中の静岡県白河氏等3名は1名凍死した。

この中で29日2日の遭難は明かに寒冷前線によるものであり、その前日28日と1日は移動高のため異常な快晴ではあったが、東方から二つの低気圧が発達しつつ迫って居り、典型的なラジオ天気図で避け得られた場合に該当するのである。3日はこの後の季節風が吹き続けたためである。1日は午前中は所により吹雪が残ったが大体は天気は快晴であった。(大井追記)

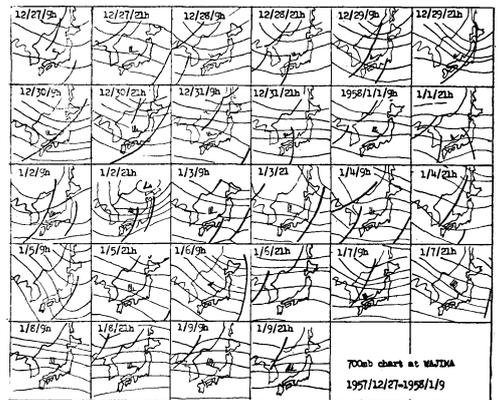
2. 白馬岳冬の気象

右 川 清 夫*

この報告は1957年12月の八方屋根スキー合宿と1958年1月の梅池スキー合宿における気候観測をまとめたものである。1957年は秋から冬にかけて積雪量が全般に少かった。これは季節風の吹き出しがおくれたこと、吹き出し回数が少なかったことがその大きな原因だと思ふ。1昨年はこれに比べると大陸高気圧の発達は著しく、早くから季節風が吹き出し、裏日本一帯は低温多雪で、我々はこの比較的規則通りの変化をうまくとらえて遠見尾根からの鹿島槍登頂に成功した。今年は我々の入山中季節風の強くなるような気圧配置を示した日は29日だけで、年内の積雪は当然少く、現地郷津さんからの便りは天気図を裏書きするものであった。

26日夕刻より降りはじめた雪は27日に到って止み、朝のうち曇であったが午後には雲の動きが大分速くなって

きて晴れそうになった。朝のうち東だった風も西に変わりそう強くない。28日は6時は全くの快晴。雲海が厚く、



第1図 700mb 天気図

* 学習院大学山岳部

朝焼けであったが昼頃までは高層雲を残して晴れていた。しかし12時に太陽は暈をかぶり虹がみられた。15時にはついに雲量10、西方が鉛色の雲でおおわれて翌日の天気は危ぶまれた。果して29日は曇から雪に変わり、夕刻には本格的な積り方になり、天気図をみればそれが裏書きされよう。30日は朝のうち止んでいたが9時頃から降りはじめた。31日は朝から雪、積雪1m。

1日は朝から快晴でこれは移動高によるものとみてよいがすぐその後から気圧の谷が近づいている。2日も季節風の強い日で1日吹雪。

3日は大町を6時に通過した。天気図では西高東低であるにも拘わらず、風力ほとんどなく、雪が降り続いていた。気圧傾度にも多少ゆるみが出来て風が1時止んだものであろう。1日中降雪が続いたが15時頃より風が西から東に変わり、薄日がさしはじめ、青空が1部に見えはじめた。その夜は晴れて月がみえた。四ツ谷と新田の灯がきれいにみえ、風は北となった。

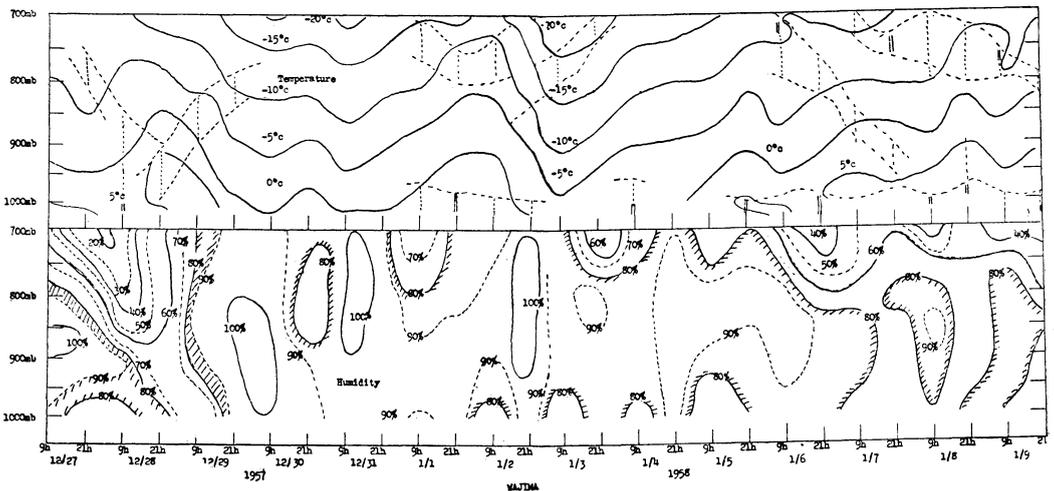
4日は樽池で -20°C 快晴。日本海低気圧の直前に当り、東支の高気圧の峰となっている。大町は烟雾であったが10時頃、一時五竜位まで雲がかかり、12時頃より出てきた高層雲は空一杯に拡がり太平洋方面のみ青空がみえている。これは日本海にある低気圧の発達の影響だと思うが、18時には北西の風、風力なく晴となり雲量もへっているのは前線の影響を受けただけではないかと思う。この3日から4日にかけてはこの冬はじめての強い大陸高気圧が張出したために4日朝は寒さがきびしく又、北陸、北日本は大荒れにあれ、遭難の多い日だった。西高東低の遭難が冬山の圧倒的なパーセントを占めるとい

統計は尊い犠牲を払って毎年裏書きされているようである。

5日は天気がだんだんよくなってきたのは東支の高気圧がはりだして気圧傾度が弛んできたためであろう。9時頃から青空がうっすらとみえはじめ、一時風が南に変わり、午後は盆地がよくみえた。遅くなって烟雾が出てきた。この日16時の気象通報によれば12時には揚子江河口には1050ミリバールの高気圧があり、明日は晴れるだろうと予報したのであるが、18時には北方上空はどす黒く曇り、地吹雪で、それでも真上の空は晴れて居り星がみえていた。山は相変わらず隠れているが雲の上の夕焼けは顕著で気温は下っている。この高気圧が本邦をおくことは確実であると思ったのだが、21時には吹雪となり、うっすらとおぼろ月だけがみえていた。

6日、天気図による予報は完全にはづれて観天望気による臆念の方が当たった。新積雪30cm。雪で視界は50m程、西の風で上空は時にうっすらとなる。午後是小降りとなり、15時にはやんだ。雲量5、視界はよく、南ア、八ヶ岳がよくみえ大町盆地以南は雲海、白馬頂上はみえるが乗鞍がかくれているということは、局部的に日本海前線の影響を受けていると考えてよいかどうか。どちらにしても、高気圧の接近ができて朝から快晴にならなかったことは確実で、高気圧勢力と低気圧勢力のバランスにもっと気をつけるべきだったと思う。この高気圧が本州南岸をゆっくり通り、次の気圧の谷が黄河流域に生れた。

7日は1日中雪。6時には南の風であったが、これより西の風となり風力も強く行動日ではなかった。15時に



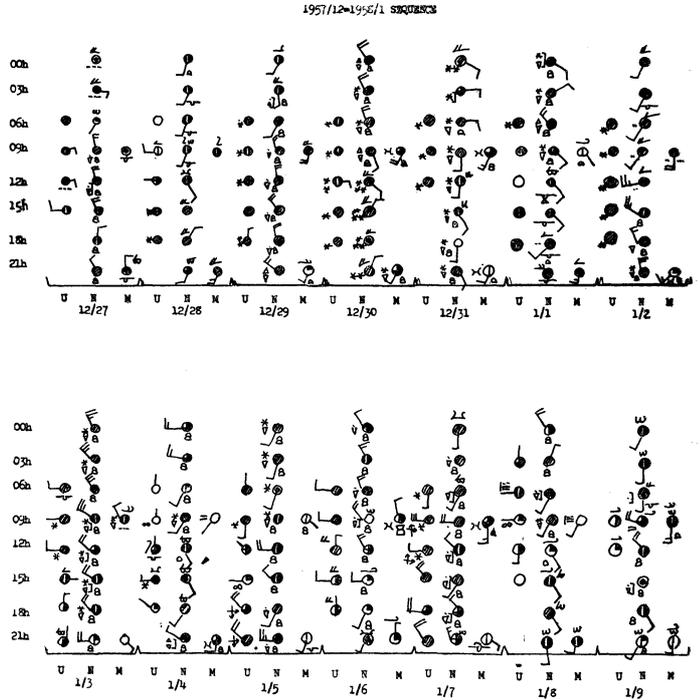
第2図 輪島気温(上)湿度(下)断面図

なり、薄日が見えはじめたのは東支にある高気圧の峰となったからであろう。白馬、乗鞍は見えず、東方は高曇であった。8日は快晴で朝のうち前日の影響で曇っていたのであるが、9時には快晴となり、大町盆地は煙霧で、これは完全に本邦が高圧帯となっている証拠である。9日は前線の影響で朝のうちは曇っていたが後には快晴。

以上が、1通り天気図と実際の天気の比較であるが、全体を通して云えることは、予報を出す前にもう少し気をつけねばならないことが二三あったと思う。それはこの年の気圧配置の特長と梅池という局地条件である。今回特に6日の予報がはずれたことは大変勉強になった。まず考えられることは大陸の高気圧が発達していないために、移動高の移動の仕方がゆっくりしていて、例年ならば、その速度で大体予想出来る天候のタイミングがはずれたこと。日本海、オホーツク方面の低気圧勢力が強くて、移動してゆく高気圧が本州南方を通過していったこと。これはもっと前の天気図の習性を頭に入れていなかったことが原因だと思う。第三に梅池は日本海に近いために海岸前線の影響も多少あるのではないかということ。特に6日の天気図をみると判ると思うが、本州南方へは気圧の峰がはり出しているのに反し、日本海沿岸はかすかにオホーツク低気圧の谷となっているのではないかということ。これらの点にもっと注意深く天気図をみるくせをつけなければならぬと思った。

さて気温断面図をみると、温暖前線は安定層の下降となり、27日と6日にみられる。6日の方は温暖前線の下降と共に雪から雲海に変わった。寒冷前線は安定層の上昇となり、28日、29日、3日にみられる。この29日のものは当然雪をもたらし、3日間続いた。3日のものは1日だけで止んだが、これは寒冷前線の高度が高かったためではないかと思う。逆転層は、逆転又は安定層となり、

1日8日にみられる。これは上層の谷の前面に現われており、従って快晴となっている。接地逆転は、1, 2, 4, 6, 7, 8, 9日にみられ、夜間副射のため下層に霧を生じた。湿度であるが、27日、28日の異常乾燥は晴に対応し、80%以上になった1日、3日、5日以後は曇に対応している。



第3図 北ア、新潟、松本のシーケンス

風は北よりは、1日9時、2日21時、3日9時、12時、6日9時、21時、7日21時、9日9時で、6日9時を除いて全部晴であった。南よりは29~31を除いては大体晴れており、輪島の風向と現地の天気は、余りよい対応を示さないことが判った。風速が25mを示した6日の9時、7日の9時は地吹雪に対応する。気圧は30日頃と3日頃に谷を示して居り、27日と1日、6日以後は山となっている。

3. 冬季中央アルプスの気象

吉川友章*

1. ま え が き

山間地における気象変化が地形の影響をうけることは

* 東京理科大学山岳部

いうまでもなく、とりわけ風と降水については著しいようである。山岳地の気流は地形に応じて迂回し、一定の径路を通して平地に達することが多い。従ってこの径路